

朗読劇 苦海浄土



蘭 光

公害は住民を苦境へと誘起する

日本の公害は、鉱山採掘の「鉱害」から始まる四大鉱害事件である。特に足尾銅山の精練は山々をはげ山にして土砂は田畑をカドミウムで汚染し村人は窮地に追われ田中正造が議職を辞して命を懸けて天皇に直訴する。生き場所を失った農民も反旗を掲げ請願のむしろ旗は村から政府へと行軍し訴えども村は廃村となる。史実を映画化し田中正造役を三国連太郎が演じ「農民は土が命」と土を食して訴えた「^{らんる}襤褸の旗」は多くの支持を得て日本公害の原点として語られる。公害「水俣病」の集団発生は熊本大学調査でチッソ水俣工場のメチル水銀排水汚染で魚介類の摂取から有機水銀中毒症と発表された。住民の汚染被害の増大に会社は非を認めず、支援者がチッソへの糾弾を始め、救援の輪は病に冒された人々が門戸を閉ざし差別や中傷に耐え目を避けるように暮らす理不尽な苦しみと困窮の中、自ら人として生きたい苦境を初めて人々のまえて静かに語り始めた……。作家石牟礼道子は患者の心の声に耳を傾け生の言葉を世の中に伝えた。支援者は相思社を拠点に患者の声をチッソ社長に直談判する川本輝夫（じっちゃん）氏の闘いは水俣闘争へと進展しチッソを追いつき全国に訴え続けて山梨集会でも水俣の現状を多くの人に語った。新潟阿賀野川昭和電工第二の水俣病、富山神通川神岡鉱業所のイタイイタイ病、三重大気汚染による四日市ぜんそく等々は生き場を失った多くの患者を苦しみ続けて世界の企業へと発展している。

追憶 苦海浄土

目の前には恋路島、御所ノ浦そしてその向こうに天草が見え、さざ波の潮の満ち干きにたゆとう夢の様な浜辺。今、時計を逆まわしにして江戸末期もしくは明治の初め頃に私はそこに住んでみたいと切に願う。不知火のリアス式海岸「水俣」に。40年という歳月をかけ「苦海浄土」を執筆し水俣病を文学の世界から世に知らしめた石牟礼道子さん。知と情の絶妙なバランスの中から私達読み手の心を揺さぶり続けている。水俣病認定から65年たち、近代社会の恩恵に授かっている今の私達の背後でどれだけの人々が凄惨かつ悲惨な思いをしてきた事か。公害も戦争も人為的なものだけに人は何と愚かなものかと胸が痛む。幼い頃の石牟礼道子さんは自伝の中で自分を「みっちん」と呼ぶ。その「みっちん」が育ってゆく家族とその環境の中で三つのキーワードに辿りつく。一つ目は「^{まれ}漂くひととき」、この世から魂が抜け出て異次元世界へゆく。二つ目は「魂の深か子」情の深い心の持ち主の子。三つ目は「義によって助太刀いたす」深い生き方で人を助ける。この三つが「苦海浄土」の元をなしていると、「みっちん」も書いています。三年前、私達日本人は本当に偉大な作家をなくしました。私も残された命を、たぶん無理でしようが「みっちん」に近づきたいと思っています。ハロ山の皆様による今回の公演が少しでも「みっちん」と水俣に住んでいらっしやった方々の「レクイエム」となる事を祈りつつ。

石牟礼道子さんへのオマージュ

プロデューサー 山本 眞樹

数年前、清水えみこさんから石牟礼道子著「苦海浄土」をプレゼントしていただき、一読してそのまま本棚に並べておきましたが、去る2018年2月石牟礼さんの訃報に接しすぐにもう一度読み直してみました。ちょうどその頃、小澤、小村、伊藤の3名の方より朗読をしたいという申し出があり、この「苦海浄土」を石牟礼道子さんへのオマージュとして読むことになりました。清水えみこさん大賛成!! 飯野洋光さんも大賛成!! ということで4月から稽古に入りましたが、予想通り悪戦苦闘しました。この度、東光寺様のご協力をいただき、公演の運びとなりました。なお、天草在住の小見田和子さんには方言の指導をして頂き、この場を借りて心より御礼申し上げます。ご来場の皆様に、今もなお続く水俣病のことを考えていただければと思っています。

スタッフ

演出助手/藤谷 清六 舞台監督/渡邊 英里子 照明/飯野 洋光 大道具/蘭 光 音響/塚田 仁 ビデオ制作/鷹野 亮司 方言指導/小見田 和子 宣伝・デザイン/山中 みゆき 制作/松永 博美 プロデューサー/山本 眞樹

プログラム

漁師釜鶴松

小澤 治子

琵琶語り 清水えみこ

李太郎少年の爺さま

小村 君枝

爺さまの叫び

武井 善人

坂上ゆき

伊藤 和美

武井 善人

西田 啓三

エピローグ

伊藤 和美



演出・琵琶弾き語り

清水えみこ